

しかし、こんな場面とは反対に、私の歩いてまわる保育園、幼稚園から、すっかり土粘土が無くなり、ろう粘土に変わってしまった現実を、土がセメントに変えられたあの冷たさと同じように、子どもは冷たさを肌で感じているのではないかと、残念に思っているこの頃です。一人一人の小さな箱に収められたろう粘土は、子どもの心の叫びに応えてくれるものなのでしょうか。「へび」「おだんご」を手の

## 泥



## 加藤 徳 弘

先で丸めて「おしまい」と時間をつぶしている姿の悲しさを、胸の痛む思いで見えてまわっています。「のびた」「うごいた」「力がある」「なげた」「べたべた」と失敗を気にすることなしに、ぶつかっていくことのできる土を子どもの前に、いつでも用意してあげたいものです。そして「あー面白かった」と私も子どもと一緒に溜息をつきたいものです。  
(弘前教会幼稚園)

私にとって泥というと、子どもの頃の泥んこ遊びはともかく、溝さらいのドロドロの泥を連想するのか、あまり良い響の言葉でない。やきもの作りを「火の芸術」とか「土の芸術」とか呼ぶことはあるが、「泥の芸術」という言葉はあまり耳にしない。やきものやでも九州など一部の地方で泥と呼ぶところがあるらしいが、我々には土のほうが自然に響く。

さて、やきもの作りに使う土にもいろいろあるが、作り

やすい、作りにくいということがまず問題になる。餅のようにただただ粘るだけでもだめ、海辺の砂のようにバラバラでも困る。餅には形を保つための腰がないし、砂に水を含ませても可塑性にとぼしく、また乾燥すると僅かの力でくずれてしまう。粘土の粒子を拡大してみると、他の鉱物と違って極めて薄い扁平状である。よく経験することだが、板ガラスを二枚重ねあわせて間に水を入れると、ツルツルと横の動きはスムーズだが、上下に斜がそうとしても少々の

力では無理である。粘土の可塑性はこうした扁平粒子の集まりでつくられている。従って細い（扁平）粒子が多くなればなるほど粘りの強い土になるわけである。しかし、粘りがあるからといって必ずしも扱いやすい土とはいえない。かえって適量の粗目の粒子や砂目（非可塑性物質）が混入していることが大切で、これが粘土の腰を強くして形をくずさない役目をする。この割合によって様々な性質の粘土になるわけだが、やきものは普通これを練り土にして使う。粘土の可塑性が最大になる水の量（可塑性水量もそれぞれに異なってくるのは当然である。つまり可塑性物質が多く、各粒子が細くなるほど沢山の水が必要になるわけである。作りやすいという点で理想的とされている粘土の可塑性水量は重量比で土の二五%前後といわれている。

冒頭に書いた泥という言葉の印象は、我々がこのような練り土（の状態）に親しんでいるせいでもあろうか。形を作るために必要な水は、やきもの作りには邪魔ものにもなる。乾燥・焼成という重要な工程で、水量の多い土ほど収縮が大きくなり、それだけ破損率が高くなるわけで、この点可塑性水量の少ない土が有利になるが、作りにくいという難問が伴うという具合に極めて厄介なものである。まして

や泥状からの乾燥は、よほど時間をかけて慎重にしても破損してしまふ。鑄込み成形という泥土を使った方法があるが、これは破損を防ぐだけの目的ではないが、水ガラス（珪酸ソーダ）を使って粘土の粒子間を離して水の量の少ない泥土にして型造りするというものである。泥をこうした狭い意味ではなく、いろいろの物質の集まりと考えれば、土も泥も同じものである。

土の可塑性とそれに対する水量といったことを書いてきたが、土の中に含まれている様々な物質はやきもの作りの上で思いもよらぬ効果や変化の原因になる。例えば、原土を乾燥粉砕して、水を加えて練り土にするが、普通これをすぐには使わず、適当な日数貯蔵しておく。土によっては何年間もねかしておく場合もある。ねかしにはいろいろの効用があるが、なかでも土中の有機物によって繁殖するカビが土の粘力を増大するという大きな役目をする。また天然に含まれた鉄分をはじめとする不純物は、高温と炎の状態によって様々な化学変化をおこし、科学だけでは割りきれない結果を生むといった具合である。

尾形光琳の弟乾山は陶器をよくし、仁清のあと京焼だけでなく、日本のやきものに大きな足跡を残しているが、そ

の『陶法伝書』に、土という土で焼物にならないものはないと書いている。たしかに形になればあの処理の仕方によってどんな土でも泥でもやきものに使えよう。ただ先記のことや、それぞれの土の耐火度等が重要な問題になる。

古代エジプトあたりで作られたあの美しい青や緑の陶器は珪酸分が多く、相当の高温で焼いたものであろうが焼きしまらずもろいものが多い。それに対してヨーロッパに多い石灰質の粘土は、摂氏九〇〇度程度で焼けるが、やはり軽いがもろい陶器である。日本の場合、摂氏一二〇〇〜一三〇〇度程度で焼成される長石質の粘土や、鉄分は多いが、やはりこの程度の温度ではほとんど完全に焼きしまる熔器粘土（例えば備前焼・丹波焼等）が多いのは実に有利である。このように各地各様の扱い方があるが、土の選択とその適切な処理をすれば乾山の言葉は決して大袈裟ではない。粘土を含水珪酸アルミナと呼ぶが、純粋な粘土は要するに石英とアルミナの混合物である。ところがこれでは耐火度が強すぎて単味では焼物用の粘土には不適當である。一部をガラス化させて焼締めるためには適量のアルカリ分を配合するか、天然にこれに加わった土を選ばねばならない。

先にもふれたように、幸にして日本列島には天然にこう

した陶土が豊富で、陶器王国といわれる最大の要素になっている。甚だ唐突だが、この天の恵みを利用しない手はあるまい。やきもの作りはまさに子どもの泥んこ遊びの延長かもしれない。創造意欲を満たすための素材として、土ほど身近にあって、しかも自由に造形の楽しめるものは少ない。しかも炎との結びつきによって創作欲は一層高められる。

私ごとだが、十年前日本陶芸倶楽部創設に参加したのも、まだまだ一般的でなかったやきもの作りの普及を真剣に考えたからである。今その夢は徐々に開花しつつある。しかしまだアメリカなどと比べると設備やアドバイザーの不足で大きくたちおくれているのは実に残念なことである。

日本陶芸倶楽部のある東郷神社の幼稚園では、卒園児にやきもの作りをさせてもう数年になる。年々面白い作品が並ぶ。大人の作品がそばで小さくなってみえるほど子ども創造力は自由で力強い。土は子どもをそれだけではなく、人の性質をストレートに伝えてくれる。土を通して多くの人々に接してきて、ものを表現するということが、器用、不器用ではなく、ただ無心に楽しむということができるといふことだとやっと最近感じはじめてきた。

（日本陶芸倶楽部）